

## 預言者の優先順位——新年を迎えて

——アジア北地域会長会年頭メッセージ——

**多**くの人、年の初めに新しい目標を作り、その目標に向かって1年間、努力をしようとします。これは、福音の中における「真の改心」並びに「霊的な自立」を成し遂げるためには、とても素晴らしい習慣であると思います。「昨年できなかったことをできるようにしたい!」または「今年、このようになりたい!」という目標は、自分の心を変える「真の改心」、預言者の勧告する「霊的自立」につながっていきます。今までの良くない行いや足りない部分を悔い改める決心をし、主への祈りを通して主の御霊の促しを受け、自分の心と行動が変わるときに、「真の改心」ができます。これはキリストの贖いの力によりです。しかしながら、わたしたち不完全な人間は、天父のみもとに行くまで、この「真の改心」を何回も何回もするように求められています。

\*\*\*

今、わたしたちに求められている「真の改心」の鍵は、十二使徒のクエンティン・L・クック長老が数年前にこの地域を訪問した際に勧告された「預言者の優先順位」を毎日の生活の中で実践することにあると思います。「預言者の優先順位」の第1は「自分と主との関係を強くすること」。第2は、「自分の家族を強めること」。第3は、「教会の兄弟(定員会)・姉妹の愛を強めること」。「その後、職業と社会の中での義務を果たすことが続きます」とクック長老は言われました。

「**第1の優先順位：自分と主との関係をさらに強める**」ためにはどのような改心が必要でしょうか？それは、毎日、聖典を読み、祈りを通して主に自分の罪や弱さを告

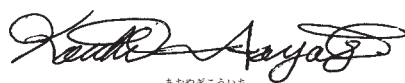
白し、悔い改めて、自分が変わることを決心することです。そして、主の贖いの力により清められ、主の愛と御霊の促しを受けて、信仰をもって自分のなすべきことを最善を尽くして行うことです。このように自主的に行うとき、わたしたちと主との関係は強められます。なぜならそこに、主を身近に感じ、主の愛と贖いの力を感じるからです。(モーサヤ4:12 参照)

「**第2の優先順位：自分の家族を強める**」ためにはどのような改心が必要でしょうか？それは、夫婦・親子が皆、「第一の優先順位：自分と主との関係を強められるようにすることではないでしょうか。そうなるためにはまず、毎日、家族で祈り、家

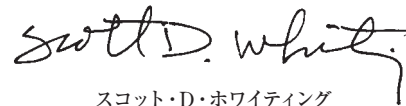
## 真の改心を遂げる年に

族で聖典を読み、毎週家庭の夕べを行うことです。さらに、夫婦・親子がキリストのような慈愛で結ばれ、主の御霊の導きを受けている必要があります。愛のないところ、また罪のあるところに主の御霊はとどまらないからです。(教義と聖約121:37, 41-42 参照) 特に夫婦は、主の望まれるような、昇栄する夫婦を目指す必要があります。互いに愛し合い、完全に献身し合う夫婦です。(教義と聖約42:22, 手引き第2部1.3.1 参照) このような両親を見て育つ子供たちは、「将来、自分も両親のような夫婦になりたい」と思うことでしょう。すぐに完璧にはできなくとも、キリストの贖いの力に希望をもって、信仰を使って、日々、改心し、努力することが大切ではないでしょうか。

アジア北地域会長会


あおやぎこういち  
青柳弘一


マイケル・T・リングウッド



スコット・D・ホワイトニング

「**第3の優先順位：教会の兄弟(定員会)・姉妹の愛を強める**」ためにはどのような改心が必要でしょうか？この点について聖典から引用します。「互いに傷つけ合う心を持たず、平和に暮らし、あらゆる人にその人が当然受けるべきものを与えたいと思うような[り]、……飢えていたり、着る物がなかったりするのをほうってはおか[ず]、神の律法に背くのも、互いに戦うのも、争い合うのもほうってはおかない……(モーサヤ4:13-14 参照) また、「自分自身でも、助けを必要としている人を助け、乏しい人に自分の持ち物を与え……、物乞いがあなたに請い願うのに応じないで、追い払って死なせるようなことをしない……。(モーサヤ4:16 参照)」さらに、「あなたがたは、神の羊の群れに入って……重荷が軽くなるように、互いに重荷を負い合うことを望み、また、悲しむ者とともに悲しみ、慰めの要る者を慰めることを望み、また神に贖われ、第一の復活にあずかる人々とともに数えられて永遠の命を得られるように……望んでいる。(モーサヤ18:8-9 参照)」

\*\*\*

わたしたちが、これら第1から第3の優先順位を、喜んで、御霊の導きを受けて、自主的に行うとき、預言者の勧告する「霊的自立」ができるようになります。信仰をもって祈り、主に喜んで従うとき、物質的にも、多くの主の祝福と助けが与えられます(モーサヤ2:41 参照)。わたしたちは、新年において、このような主のビジョンに近づくことができるように、皆さんと皆さんの家族の中に、さらに新たな変化(改心)があり、生活の中に主の愛と喜びがあふれるように願っています。◆

# 日本福岡神殿の金城正之会長が急逝される

— 「愛すること、助け合うこと、一致すること」を体現した生涯

**20** 14年9月4日午前2時10分、福岡神殿会長の金城正之兄弟が福岡市内の病院で家族に見守られながら逝去された。享年69、神殿会長としての召し半ばでのことだった。

\*\*\*

金城会長は1944年(昭和19年)に沖縄県那覇市首里に生まれた。1970年に広島地方検察庁検事に任官し、その2年後に文子姉妹と結婚。1975年に那覇地方検察庁へ転勤した。1981年、宣教師の戸別訪問によって福音を知り、同年7月、首里ワードにおいて3人の娘を連れて夫婦でバプテスマを受けた。

さまざまな地方へ転勤する中で、ビショップリック顧問や支部会長、インスティテュート教師、伝道主任、大祭司グループリーダー、日本那覇ステーク会長などの職を果たし、2012年11月に日本福岡神殿会長に召される。

当時、金城会長は沖縄でたった1人の那覇公証人として勤務しており、後任に引き継ぎを終えるまでの数か月間は、月曜から水曜までの3日間を沖縄で公証人として働き、木曜から土曜までの3日間を福岡神殿会長として神殿で奉仕した。全ての時間を神殿奉仕に使えるようになってからは精力的にワードや支部を訪問し「あなたの居場所は神殿ですよ」と多くの会員に呼びかけた。

## 【主の召しを全うして燃え尽きたい】

2013年8月に入った頃、文子姉妹は金城会長の体力の低下を感じるようになった。召しを受ける段階で間質性肺炎を疑われていたことが文子姉妹の心をよぎる。「少し休んでほしい。」文子姉妹の心配をよそに金城会長は、疲れを知らない若者のように働く。

11月に入って金城会長は風邪を引き、こじらせてしまった。これが引き金になって自宅と神殿に酸素ポンペを置くようになる。奉仕中に酸素が必要となる局面が出てきたものの、障害を物ともせず、酸素ポンペを引っ張りながら笑顔で皆を迎え送りする。口癖の『愛すること、助け合うこと、一致すること』をモットーに愛にあふれた神殿を保つ。しか



し、金城会長の思いとは裏腹に体力は落ち続け、酸素吸入が頻繁になり、あっという間に24時間酸素を補わなければならなくなった。「それで神殿の年末の休館に合わせて暖くなるまで療養してもらうことにしました」と文子姉妹は語る。神殿で奉仕する文子姉妹と離れて沖縄の自宅に帰り、2014年3月まで休養を取った。「『療養生活で長く生きることも大切だけれど、自分は主の召しを全うして燃え尽きたい』と何度も言っていました。その覚悟が兄弟にはあって、酸素吸入をしながら(の状態)6月に神殿へ戻りました。」会員たちは酸素ポンペを引っ張って歩く金城会長を目にするようになる。それから入院するまでの約3か月、金城会長はひるむことなく奉

仕を続けた。「きちんきちんと最後までやり通す人ですから、少しくらい風邪気味でも、『大丈夫だ』と朝早くから面接をして、訓練集会をしてと全てこなすわけですね。たまには酸素が外れたまま

2時間も気づかずにいて、周囲の人が『これはもう奇跡ですね』と驚くくらいでした」と文子姉妹は振り返る。「神殿会長会第一顧問の白石会長ご夫妻、第二顧問の赤木会長ご夫妻は、『わたしたちは金城会長の船に乗ったので、最後まで金城会長とともに頑張ります』と言われ、わたしたち夫婦を支えて助けてくださいました。また神殿ワーカーの皆さん、会員の皆さんが助けてくださいました。心から感謝しています。」

## 励まされた会員たち

金城会長は、7月28日に入院する直前までいつもと変わらない奉仕を神殿で続けた。この、全てを主にささげて奉仕する姿が多くの会員や指導者の心を打つ。

「これから伝道に出る若い会員たちが、面接と按手任命を受けるために福岡神殿に入ったときに、酸素吸入をしながら頑張っている金城会長の姿を見て涙を流し、このように言っていました。『わたしが伝道で試練に遭ったときには、金城会長のことを思い出して頑張っていきたいと思います。』大きな問題を抱えた方も『元気な金城会長もよかったです』



2012年、金城ご夫妻は新神殿会長セミナーのためソルトレーク・シティーを訪問した。  
(上写真) ウィリアム・R・ワーカー長老(左)と  
ダリン・H・オークス長老(右)とともに

れど、こんなになって頑張る会長から力も  
らえます。頑張れます』と言っていました。  
重い病気を抱えた人たちは『何もかも順調  
で幸せな人にはわたしたちの苦しみを伝え  
ても分からない。でも金城会長はこんな状  
態で頑張っているのだからわたしたちの気持ち  
を本当に分かってくれる』とおっしゃるん  
です。」金城会長の隣で文子姉妹は多くの会員  
の言葉を聞いた。

「九州のステーキ会長さんたち指導者も  
(金城会長が) 休んでいる神殿会長室にやっ  
てきてはひざまずいて手を握り、『金城会  
長に会うだけで力を頂いています。生き方が  
変わりました。頑張れます』と言われるん  
です。そういった方たちの姿を見るたびに、  
神様がおっしゃった『神を愛し、隣人を愛  
しなさい』という戒め、愛して思いやっ  
て助けることがいかに大切かを(学びまし  
た)。たくさんの方の教義を覚えることより  
も、相手に尽くすことが神様の求められて  
いることかなと学びました。」

### 心臓の鼓動の続く限り

入院後も少しずつ体調は悪化し、8月28  
日に容態が危ないと感じた文子姉妹は、  
沖縄に住む3人の娘に電話をする。入院し  
ていることすら知らなかった長女のみゆき  
姉妹、次女の瑞枝姉妹、三女の正代姉妹  
はそれぞれの家族(2歳から小学生の孫8  
人と夫)とともに翌29日、父親のもとに集  
合した。「(3家族)14人みんなが(病室  
に)来て、そのとき父は意識が朦朧として  
いたんですけど、孫たちが声をかけて歌を  
歌って、夫たちが頭に手を置いて祝福を  
した直後に目を開けて『ああ!』と全員を  
確認したんです」と長女のみゆき姉妹は語  
る。

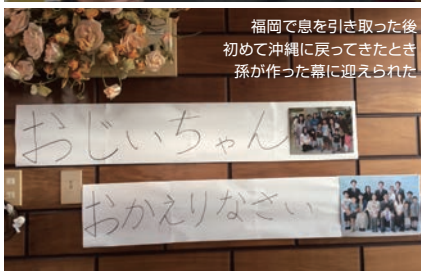
それから毎日、孫たちは病室を訪れ賛美  
歌を歌って聞かせた。金城会長は話すこ  
とはできなかったものの目で喜びを表現し、  
手を握り指でさすることで愛を示した。文  
子姉妹も、金城会長のそばを片時も離れ  
ることはなかった。

「その様子を見ていたある看護師さんが、  
『家族、夫婦のあり方を学ばせてもら  
いました。孫たちが毎日おじいちゃん  
と言って毎日お見舞いに来たり、奥さん

3人の娘夫婦、  
8人の孫たちに囲まれて



6番目のお孫さんを抱く金城兄弟



福岡で息を引き取った後  
初めて沖縄に戻ってきたとき  
孫が作った幕に迎えられた

がずっと毎日付き添っているのは、なかなか  
見たことはありません』とおっしゃられて、先  
生や看護師さんの態度がどんどん変わってき  
て、最後の最後まで大事に細やかにやってく  
れました」と文子姉妹は感謝する。温かい  
看護と治療の中で、家族に看取られながら金  
城会長は末期を迎えた。

\*\*\*

棺に収められた金城会長は多くの会員に  
見守られながら福岡を後にし、沖縄の多くの

会員に迎えられて自宅に戻った。自宅には、  
長らくお休みをしていた会員や、金城会長  
にお世話になったという会員が多く集まった。  
「告別式は沖縄那覇ステーキセンターで行  
いました。全ての準備を多くの教会員たちが  
心からの奉仕で行っていただきました。また、  
たくさんの方の心温まるお手紙も頂きました。  
多くの方々の助けにより、神様の愛と御霊  
をあふれるほどに感じ、悲しみよりも感謝  
の気持ちで満たされました。この愛と親  
切がどれほどわたしたち家族を力強く勇気  
づけ、支えとなったことか。愛と思いやりの  
助けが一番だと。皆様を通して神様の御心  
を感じる事ができました」と文子姉妹は述懐  
する。

告別式で、地域七十人の田代浩三長老は  
こう弔辞を述べた。「福岡神殿に参入すると、  
愛する金城会長とメイトロンが愛に満ちた  
優しい笑顔でわたしたちを温かく迎えてく  
ださいました。その顔が今もはっきりと浮  
かびます。金城会長は病気が悪化されても  
酸素ボンベをおつけになられてご奉仕され  
ました。そのお姿から、ニール・A・マク  
スウェル長老のお言葉(が浮かびます)『心  
臓の鼓動の続く限り、その鼓動している時  
間の幾らかは人に手を差し伸べるために用  
いるべきです。また肺に息のある限り、その  
息の幾分か、しかるべき賞賛と必要な励  
ましを人に送るために用いるべきです。』

まことにそのようであられました。」

### 人々に手を差し伸べ、強い影響を及ぼす

送られてきた手紙やメールの中に一人の姉妹の手紙があ  
った。金城会長が宮古島で支部会長を  
していた頃から知っている姉妹だ。彼女  
が独身の頃、金城会長は伝道に出るた  
めの手助けを





金城会長ご夫妻と福岡神殿会長  
左が白石ご夫妻  
右が赤木ご夫妻

した。精神面だけでなく経済的にも困っている彼女に、文子姉妹にも本人にも言わず、金銭的な援助をした。彼女が後に、「伝道資金を援助してくれたのは金城兄弟ではないですか」と問いかけたとき、金城会長は、「姉妹、それは足長おじさんがやったと思った方がいいですよ」とかわした。結婚して子供が生まれ、彼女が幼い子供を抱えて独り身になってからは家族のように寄り添った。子供たちは大きくなっても金城会長の誘いに応じていつも集まった。子供たちにとって金城会長は父親代わり、おじいちゃん代わりだった。きょうだいのうち二人が伝道に行き、一人は教会の大学に進学した。姉妹の手紙には、「金城ご夫妻の助けがなければ子供たちは順調に育ってはいません。わたしも心を病んだかもしれません」とあった。感謝の詰まった手紙やメールが金城家には今も届く。

\*\*\*

金城会長は35年余にわたり日記をつけていた。入院直前あたりから書くことが難しくなり、日付だけのページが続く。その中で7月23日の日記を文子姉妹は「わたしたちへの遺言です」と言う。

「7月23日(水) あなた方が立ち直った時は、兄弟たちを力づけてやりなさい。ルカ 22:32。まことに改心した人は、贖罪の力に

より、自らの魂に救いを得、その後その人を知るすべての人々に手を差し伸べて、強い影響を及ぼすのです。ヨシュア 24:31」

文字の形も大小まばらで行も乱れている。苦しい息の下、金城会長の思いが聖句でつぶられていた。その思いを受け継ぎ、これまで金城会長が手を差し伸べてきた独り身の兄弟姉妹に対して、「これからはわたしたちが兄弟の代わりに、その人たちに目を向けて、ただ思いやるのではなくて形(に表すこと)で、兄弟の気持ちを形作っていこうと計画を立てています」と文子姉妹は話す。

長年の公務での功勞により、2014年11月に天皇陛下より、叙位叙勲・従四位瑞宝小綬章を授与された金城兄弟。そうした全てが思い出につながっていく。「困ったときには神様に祈りながら、ここ(遺影の前)で主人に話したりすると必ず助けがあるんですよ。わたしだけじゃなくて家族みんなに。そして心を打つ経験がいっぱいあって、本当にいつも(わたしたちの)そばにいて、神様と主人が見守っていてくれるなって感じます。」

「今、苦しかった病苦から解放されて元気で伝道している、神様のもとにいる、ということがいろいろな形で伝えられます。神様とともにわたしたちを守っているし頑張っているから、わたしたちも胸を張って会えるように、自分たちの生き方を見直して頑張りたいですね。」すがすがしい表情で語る文子姉妹の後ろで、遺影の金城会長の満面の笑顔が輝いていた。◆



## 日本福岡神殿会長会を再組織

金城会長のご逝去に伴い、日本福岡神殿会長会が再組織された。新たな神殿会長に、これまで神殿会長会第一顧問であった白石靖行しらいしやすゆき会長、メイトロンに白石てる子てるこ姉妹が召された。第一顧問に、これまで第二顧問であった赤木英夫あかきひでお会長、メイトロン補佐に赤木千里ちさと姉妹が召された。※1

また新たな第二顧問に永友裕兄弟、メイトロン補佐として永友栄子えいこ姉妹が召された。

### 永友裕会長、栄子メイトロン補佐の紹介

永友会長は1952年宮崎県串間市くしまに生まれる。1972年に自ら教会の門を叩いて改宗し、1976年に栄子姉妹と市民結婚。1979年にハワイ神殿で結び固められる。

鹿児島大学教育学部を卒業後、36年



にわたって小学校に勤務。教諭20年、教頭5年、校長を11年務める。1987年から1990年の3年間、アルゼンチンのブエノスアイレスにある日本人学校きょうがくで教鞭を執る。

教会の召しとしては伝道主任、支部会長、地方部会長、高等評議員、大祭司グループリーダー、伝道部会長顧問、夫婦宣教師などの責任を果たしてきた。趣味はゴルフ

と旅行。これまでに南米、北米、ハワイ、イタリアなどを旅した。好きな聖句は第2ニーファイ 25:23『わたしたちが自分の行えることをすべて行った後に、神の恵みによって救われることを知っているからである。』

栄子メイトロン補佐は1944年に鹿児島県霧島市きりしまに生まれる。文化女子短期大学で生活芸術学科を専攻、室内装飾の制作からディスプレイまで幅広く学ぶ。1972年に2人の宣教師の訪問を受けて改宗する。

教会においてはこれまでインスティテュート教師、支部扶助協会会長、地方部扶助協会会長、地方部若い女性会長などの召しを果たしてきた。趣味は読書、旅行、お菓子作り。好きな聖句は箴言3:27『あなたの手てに善をなす力があるならば、それをなすべき人になすことをさし控えてはならない。』◆

### 献血プロジェクト

——さいたまステーキセンターに献血車を招聘

アジア北地域会長会からの提案を受け、去る10月25日にさいたまステーキで「献血プロジェクト」が行われた。日本赤十字社との協

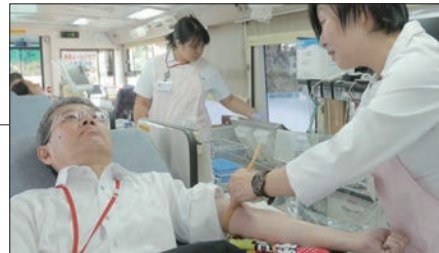
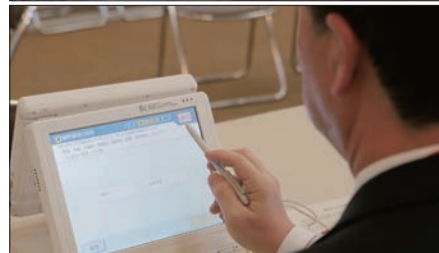
力の下、浦和のさいたまステーキセンターに献血車を招き、教会の建物を献血会場とし

て活用してもらう。多目的ホールには、受付、献血前の審査（血圧・脈拍測定や電子画面による問診、献血カードの発行など）のブースが設けられ、医師、看護師が待機している。献血希望者は一連の順路を通り、献血適性が確認されると、駐車場に停められた献血車に入って採血に臨むことになる。献血終了後はホールに戻る。赤十字から提供された飲料を受け取り、しばし休憩して教会を後にする。

教会員たちが友人知人と誘い合って参加したり、ボーイスカウト・カブスカウトの隊員が駅前でも献血を呼びかけたりして、献血会場は活況を呈した。この日、来場したのは145人、うち11人は教会員でない方であった。献血受付人数は117人、そのうち200mlが24人、400mlが69人、合計93人が献血した。24人は審査の結果、献血を見合わせた人々である。献血センター側では通常、献血を見合わせる人が2割前後出るとは織り込み済みであり、この日は受付数110人、採血数80人を目標としていた。

今回、さいたまステーキではステーキ広報ディレクターがステーキの指導者をサポートしながら、この献血プロジェクトを準備した。全国広報評議会が中心となって取り組んでいる企画であり、今年度は試験的に幾つかのステーキに依頼して実施している。教会側としては、会場を提供し教会員が献血することはもとより、モルモン・ヘルピングハンズ活動として地域の人々に献血を呼びかけたり、来場者の誘導や案内に当たったりすることも、大切な奉仕の機会と捉えている。

これは将来的には「奉仕の日」として全国で一斉に行うことを構想している。アジア北地域広報部ではこう説明する。



「来年以降は献血プロジェクトを希望するステーキや地方部へ、全国広報評議会が試験的に実施して得られた各地の運営ノウハウや改善点などの情報を提供していく予定です。地域会長会が願っているように、奉仕の日という形で、アジア北地域内の日本、韓国、グアム、ミクロネシアでも可能な限り同じ日に実施していく方向になると思います。教会員だけがモルモン・ヘルピングハンズの奉仕活動に参加するのではなく、会員が奉仕活動に友人を招いたり、地元の広報ディレクターがオピニオンリーダーとなっている方々を招くことが広報としての目的の一つになっていきます。」いわば教会が、社会に貢献する奉仕活動の拠点として地域の人々に知られることを目指している。

#### 教会の雰囲気を感じていただく機会

アジア北地域の広報活動の神権アドバイザーであるスコット・D・ホワイティング長老は次のように語る。

「わたしがハワイ州とカリフォルニア州西海岸で地域七十人の責任を受けていたとき、それぞれのワードやステーキが中心となって献血のプロジェクトを行いました。青少年が教会の近隣へ献血の日時を告知するチラシを配布し、会員たちも献血に協力してもらうために友人や家族を積極的に教会堂へ招きました。多くの献血を集めることも大切なことですが、献血をする方々に教会堂の中へ足を運んでもらい、教会と教会員の雰囲気を感じていただき、教会が地域社会へ奉仕するセンター的な役割も担っていると知っていただくことに重点を置きました。まずは、教会堂の中を見ていただくこと。それが大切だと思いました。」



さいたまステークセンターのホール。舞台上に献血の審査を待つ人の列があり、右に向かって受付、血圧・脈拍測定、電子画面での問診、血液検査……と続く。左手奥のモニターでは日本赤十字社の献血啓蒙ビデオが流された。

その後も、ハワイ州やカリフォルニア州で行われたモルモン・ヘルピングハンズの活動は、「モルモン・ヘルピングハンズの日」または「奉仕の日」という名称で地元浸透し、4月の第4土曜日に一斉に活動が行われることが年中行事として地域

社会に定着している。現在では献血だけではなく、奉仕の内容は多岐にわたるが、毎回約7万人の人々がボランティア活動に参加する。そのうちの約1万5,000人は教会員ではない。

日本ではまだ試験段階ではあるが、こ

まずは、教会堂の中を見ていただくこと、  
教会が、地域社会へ奉仕するセンター的な役割も  
担っていると知っていただくこと、  
それが大切です。

うしたビジョンの下に計画が進められて  
いる。名古屋東ステークでも11月22日  
に献血プロジェクトが試験実施され、献  
血受付数59人、採血数50人（全員が  
400ml献血）を記録した。◆



[urx2.nu/eCPd](http://urx2.nu/eCPd)

★関連する動画ニュース LDS Local Plus+がご覧いただけます

## 各国大使と人道支援について語り合う

—アジア北地域会長会がフレンドシップ・ディナーを主催

**各**国大使館の大使と大使夫人を招いての夕食会が11月4日に開催された。アジア北地域会長会が主催者となり、ゲストを迎えた。

36人の大使館関係者が集う中、アジア北地域会長会からはマイケル・T・リングウッド長老、青柳弘一長老、スコット・D・ホワイティング長老が出席した。既に教会の代表者と面識のある大使もいれば、広報部から招待を受け初めてこの夕食会へ出席する大使もいた。地域会長会が各大使と懇談する際には、それぞれの国で教会が実施している人道支援活動や教会のさまざまな活動について紹介する資料が渡された。会場内には、人道支援をはじめとする教会のさまざまな社会貢献活動を紹介するディスプレイが設置された。

フレンドシップディナーと名付けられたこの夕食会は、3月に開催された大使夫人との昼食会、6月に開催された他宗教の代表者との夕食会に続き、広報部が支援する重要なイベントとなっている。

大使館関係者が集うことから、中山泰秀外

なみやまやすひで

務副大臣も出席し、教会が行ってきた人道支援活動や国際貢献を賞賛するスピーチを英語で披露した。各国のオピニオンリーダーとの良好な関係が築かれ、教会が継続して行っているさまざまな取り組みに関心が持たれることは、教会員と教会に対する正しい理解へとつながっていく。アジア北地域の広報活動を担当するホワイティング長老は壇上に立ち、「わたしたちの教



ホワイティング長老と中山副大臣



中山外務副大臣のスピーチ



ゲストと談笑する青柳長老

ゲストを歓迎するリングウッド会長(右)



会については、さまざまな人道支援活動、そして、教会員によるモルモン・ヘルピングハンズというボランティア活動のことが広く知られています。今後もわたしたちがお手伝いできることがあれば、いつでも声をかけてください」と出席者へ呼びかけた。◆



[bit.ly/127ufd2](http://bit.ly/127ufd2)

★関連する動画ニュース LDS Local Plus+がご覧いただけます



● 心に向ける、心を変える

# 孫娘の視点でとらえ直す、家族の肖像

— 小冊子『わたしの家族』で再新された家族のきずな 大阪ステーキ阿倍野ワード 坂本ご家族

**毎**晩9時になると、大阪ステーキ阿倍野ワードの坂本家ではテレビを消し、各々の仕事や勉強の手を止めて、両親と三女の早彩姉妹の家族3人がリビングに集まる。一日の生活の中で感じた霊的な経験を全員が順番に話していくのだ。家族の祈りを含めて5分から10分の小さな時間。長女の亜彩姉妹が片言で話し始めてからずっと続けてきた家族の聖典勉強が、姉たちの結婚などをきっかけにこの形に変わってから1年以上がたっていた。その毎晩の家族の集まりの中で出てきた会話、「系図もしないといけない。じゃあ、この時間にやろうか」——自然な流れの中で“ファミリーツリーの夕べ”は始まった。早彩姉妹は小冊子、両親はオンライン版での『わたしの家族』の完成を目指した。

## ビショップの勧告で始まった

「ずっとビショップの勧告が気になっていました。」父親の坂本正孝兄弟は、当時のせき立てられた胸の内を明かす。

2013年末の什分の一の面接の際、坂本家の一人一人にも『わたしの家族』が手渡された。2014年初めの聖餐会ではビショップから、「今年はファミリーツリー、これで行きます」との力強いビジョンを聞いた。坂本家では系図は既に提出し、儀式も行っている。しかし、『わたしの家族』には、半年を過ぎてまだまだ、家族誰もがほとんど手つかずの状態だった。正孝兄弟は家長として、これではいけないと思った。同じ頃、母親の眞澄姉妹も、総大会や中央扶協助協会集会で語られた家族歴史に関する勧告に心を動かされていたという。

阿倍野ワードではほどなくして、「ファミリーツリーの集い」が計画された。安息日の3時間プログラムの全てを、ファミリーツリーに関する話やレッスンで埋め尽くすというものだ。坂本家にも発表の割り当てが与えられた。

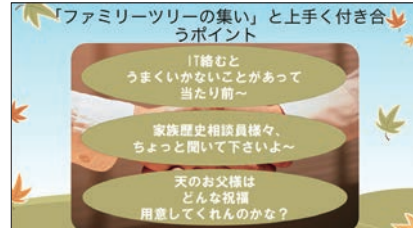
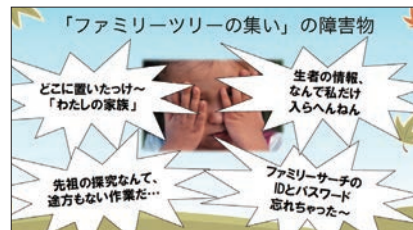
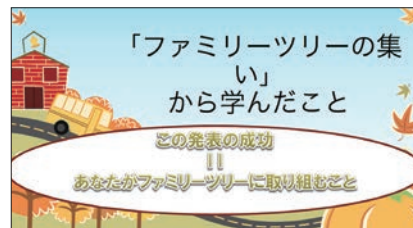
あと1か月というせば詰まった状況の中で、坂本家族は資料を持ち寄り、作業に取りかかった。

## 不具合が気にならなくなりました

しかし、登録しているのにログインできない。早彩姉妹のIDでは、生者である祖母の情報が入力できず亡くなった先祖までさかのぼれない。他にもシステム上のさまざまな不具合が続出した。「毎回、問題が山のようにありました。でも、壁にぶつかることがあってもとりあえず入力していきました。内容を埋めていくにも結構時間がかかるんです。やることはいっぱいあるんですよ」と眞澄姉妹。家族歴史相談員や家族歴史宣教師の助けも大きかった。

そのうち、不思議な心の変化が訪れる。「7回目くらいから不具合が全然気にならなくなりました。問題があって当たり前。いつか必ず解決するだろうと。問題があることが分かってよかったとも思うようになりました。」楽観的に取り組めるようになった。やがて、「7時頃からでも、誰かが『やろうか』と声をかけたら始めていました。気がついたら1時間くらいはすぐにたっていましたね。」ファミリーツリーの夕べは20回を超えた。この業を妨げる力は影をひそめ、全員が目標をやり遂げることができた。毎日が家庭の夕べのようだったという。「我が家の場合、1週間に1回

坂本ご家族が発表したプレゼンテーションより抜粋



の家庭の夕べでやろうとか思っていたらとでもできなかった。家族一緒に根を詰めてやったのがよかったのかもしれないね」と正孝兄弟は振り返る。

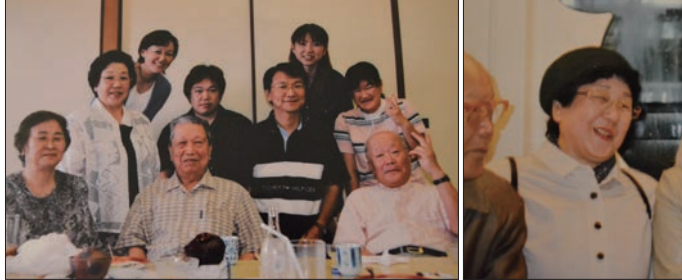
8月31日に行われた『ファミリーツリーの集い』では、完成した『わたしの家族』を基に家族の発表を行った。集会後には早彩姉妹と正孝兄弟がパワーポイントを使って、なぜファミリーツリーが進まないのか、どうしたらよいかを考察した短いプレゼンテーションを行った。「うまいかないことがあって当たり前、家族歴史相談員に尋ねよう、青少年時代だけでなく生涯にわたってサタンの影響から守られる、という



坂本ご家族  
前列左端が早彩姉妹

## ● 心を向ける, 心を変える

早彩姉妹(2列目右端)と両親、  
父方、母方両家の祖父が集った写真



神様の祝福を知ることが大事」と結んだ。早彩姉妹は「教会のプログラムで、誰かの助けを必要としないプログラムは何もないと思います。できないと思ったとき、自分の力では続けられないと思ったときに、家族歴史相談員がいます。障害があって当たり前だけど、神様の戒めにはちゃんと道が備えられています」と証する。

### 話せたことがうれしかった

早彩姉妹の父方と母方の祖父はすでに他界しているが、両家の祖母は健在だ。「おばあちゃんについては父と母から話を聴いていただけ、今のうちに話を聴いておこうと思いました。」坂本家は親族とのきずなを大切にしている。母方の祖母は隣の市に住んでおり、早彩姉妹は2か月に1回は祖母に会っていた。それでも、きちんと対面して話を聴く機会はこれまではなかった。今回、祖母から人生のストーリーを聴いてみて、「母から聴いた話と重なっている部分もありましたが、やはり直接経験した人から、その人の言葉で聞くことができてよかった。祖母は昔を思い出して話しながら、『つらかった経験も、ちょっとは良い経験だったかな。』そう思ったのではないかなと感じました」と早彩姉妹は語る。

早彩姉妹の母(眞澄姉妹)も、これまで何度か祖母に昔のことを尋ねてみたことはあるが、祖母は戦争一色だった当時を思い出すのを嫌がり、ほとんど話してくれなかったという。話し始めても、不快感が募り途中で怒り出すこともあった。爆風にあおられ手をつないで逃げた経験が、語ることで生々しくよみがえる。次第に母も、祖母から昔の話をあえて聴こうとはしなくなっていた。

しかし、孫との話を終えた数日後、祖母は眞澄姉妹に電話で心中をこう打ち明けた。「早彩がわたしの青春時代や昔のこと、とうに亡くなった母親(曾祖母)のこと

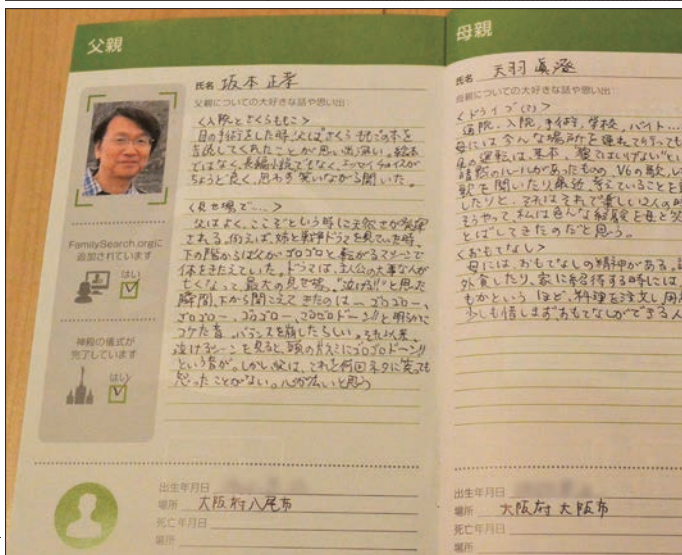
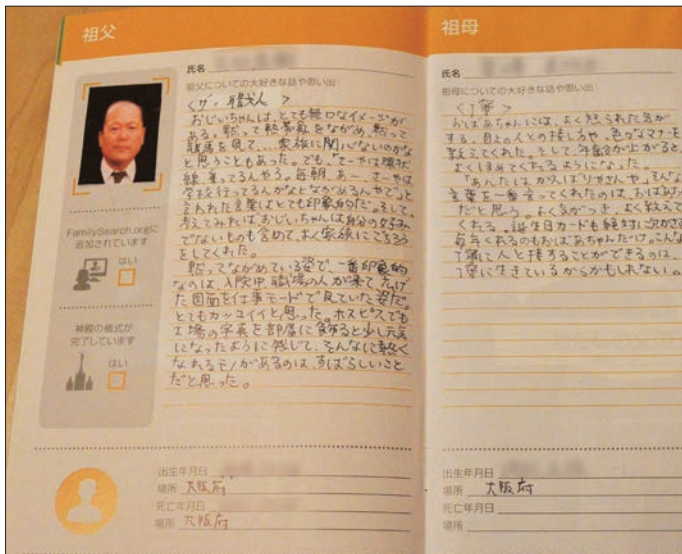
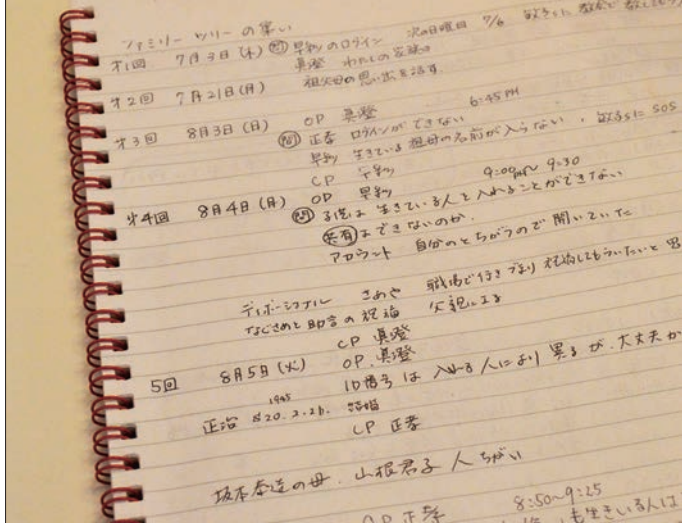
まで聞いてくれてすごうれしかった。振り返って昔を思い出せたことも、その話を言葉にして早彩に話せたことも、本当にうれしかった。」あまりにも意外な祖母の言葉だった。

### 自分でつかんだおばあちゃん像

「祖母はどちらかというとなガティブに捉える人かな。その代わりに、いろいろなことによく気がつく人。気を回して、先々のことを読むことができる人だと感じています。」早彩姉妹は、両親から聞いたままではない、自分で捉えた祖母の肖像を『わたしの家族』にこう記した。「おばあちゃんには、よく怒られた気がする。目上の人との接し方や色々なマナーを教えてくれた。そして年齢があがると、よくほめてくれるようになった。『あんたはがんばりやさんや』そんな言葉を一番言ってくれたのは、おばあちゃんだと思う。よく気がつき、よく教えてくれる。誕生日カードを絶対欠かさず毎年くれるのもおばあちゃんだけ。こんなに丁寧に人と接することができるのは、丁寧に生きているからかもしれない。」

その言葉を聴いて、眞澄姉妹の眼から涙があふれた。「丁寧に生きている……ああそうだな、と思います。」自分の母親が娘にどう映っているのか、内心不安だった。「母は本当に厳しいんですね。ひ孫にまで怒る。だから、娘が書いてくれたのを見て、母をそんな風に思っていたけれど、

坂本家の「家族歴史の夕べ」を記録したノート。突き当たった疑問の軌跡が読み取れる



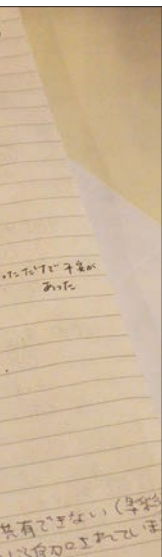
早彩姉妹が独自の視点でつづった『わたしの家族』は、ご両親にとっても大きな価値があった





母親の眞澄姉妹と母方の祖父母

娘や孫の世代が、先祖について思いをはせたり、言葉でまとめることで、自分自身が分かってくる。



わたしが気づかなかった良さにも気づいてくれた、そのことを知ってものすごくうれしいです。」娘がもたらした慰めが胸を満たした。

\*\*\*

病気のために入

院して手術を受けたときも、臨床心理士をめざして厳しい勉強に取り組んでいたときも、早彩姉妹の気持ちや努力に気づいて、よくほめてくれた祖母。あの優しさや厳しいまでのしつづも、自分の将来を考えて丁寧に関わってくれていたということなのだ。はっとする気づき。早彩姉妹もまた丁寧に祖母の人生を聞き取り、記録することで、自分でおばあちゃん像をつかんだ。「これまでも祖母はこんな人だな、というのはなんとなくあったけれど、『わたしの家族』に書くためには言葉で表現しないとイケない。人に伝わる形にしないとイケないから、自分の中でまとめ直す作業があって、どういう言葉が当てはまるかを考えました。そうやってイメージが固まってきて、わたしのおばあちゃん像ができました。」祖母を誇らしく思う気持ちが膨らんでいく。「おばあちゃん像をはっきりさせることによって、わたしもこのように思われたいな、と思いました。自分もその時代になったときに、これまで何をやったかを言えるかな。祖母のように子孫にきちんと伝えられるようになりたいと思います。」

娘の言葉を一言も聞き漏らすまいと耳を凝らす眞澄姉妹。その思いは自身の子供時代にさかのぼっていく。少しの沈黙の後、眞澄姉



母方の祖母と早彩姉妹

妹は語った。「娘が『わたしの家族』を仕上げたときには感動しました。ここなんだ!」と思いました。娘や孫の世代が、先祖について思いをはせたり、言葉でまとめることで、自分自身が分かってくる。わたしも家族歴史を通して、子供時代はあまり恵まれない家庭環境だったけれど、その中でも精いっぱいのもの、親として与えられる最高のものを子供にささげてくれたこと、その愛に気づくことができました。」眞澄姉妹はオンライン版の『わたしの家族』に、変化していく母親への思いを更新していこうと思っている。

### 娘から聞く先祖の心

父方の祖母は89歳。自宅から歩いて10分の所に住んでいる。早彩姉妹も眞澄姉妹もこれまで一度も祖母が怒ったところを見たことがない。だから最初、早彩姉妹は、ほのぼのとしたほんやりした人かなと思った。が、父や伯母から、昔はすごく厳しい人だったと聞いた。「さぞ穏やかな人なのだろうと思っていたが、実はすごく厳しい人だったとか。ということは、気がつかない性格ではなく、気がつかないように見せているということなのだろうか。」祖母の意図を読み取って、早彩姉妹はこう記した。眞澄姉妹も同意する。「意思があるよね。全部含めて受け止めている。」

正孝兄弟は記憶をたぐりつつしみじみと語った。「いつからだったかなあ。結婚したらまったく怒らなくなった。わたしのあがままを受け入れようとしてくれてい

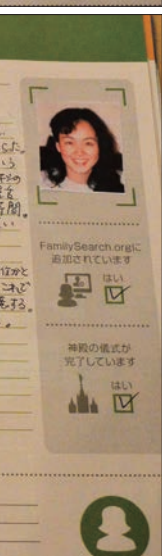
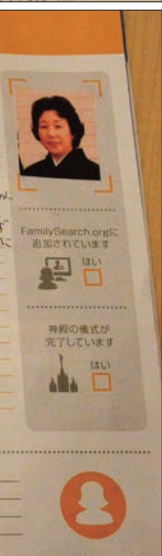


ファミリーツリーの夕べ

る。きっと自分の思いはいろいろあると思うけれどね。」感謝の念が込み上げてくる。秘められていた祖母の思いが、孫娘の記録を手がかりにひもとかれていく。89歳にして、子供や孫や友達が絶えず訪れるという忙しい祖母。その人望は、「持って生まれたものかと思っていたけれども、努力の結果なのかもしれない」と考察する早彩姉妹。祖母の奥底にある気高い特質を見だしていく娘の言葉に、襟を正して聞き入る父の姿があった。

### 素直に従うことが大事

「わたしの中の(家族歴史の)始まりは、ビショップから、青少年が自分のIDとパスワードを持っているかどうか確かめるように、と言われたことでした。」早彩姉妹はワード若い女性会長会顧問の召しを受けている。まずは指導者の自分がIDを持っているか確認することから始まった。「わたしの場合、父母がこれまで調べてきた積み重ねがあったので、システムの問題以外は全然苦労しませんでした。『わたしの家族』を書き進めている中盤くらいから、この後自分がなすべきことは何だろう、これをどうやって青少年に伝えていこうかと考えるようになりました。」さまざまな事情で思うように進められない青少年をサポートすること、これが自分のすべきことだと感じた。「自分は何も特別なことはしていない。青少年にはそんなにたいした作業じゃないよ、と言いたいんですね。家族歴史相談員も助けてくれる。まずは言われ





子供たちが先祖を知ることが大事。子孫のために記録を残すのではなく子孫に引き継いでいくことに意味がある。

たことをやってみようよ、ということかな。」

「そのとおりなんです。ビショップの言うことを素直にやるのが本当に大事なんですよ。」父親の正孝兄弟が間髪を入れずに言葉を挟む。「40年前に教会に入ったとき、ビショップから先祖の探求のために戸籍謄本を取るようと言われました。素直に謄本をいっぱい取ったのでよかった。今回も、ビショップに言われたことをやったので、何か意味があると思っています。」作業の途中で、これまでどうしても見いだせなかった先祖の名前が分かるという奇跡も経験した。「さて、主はある賢明な目的のために、わたしにこの版を造るように命じられたが、その目的はわたし

には分からない。しかし、主は初めからすべてのことを御存じである。」(1ニ一ファイ 9:5-6)

眞澄姉妹は実は当初、「誰かが触るとややこしくなるので、自分が入力した家族歴史にあまり触ってほしくないとの思いがありました」という。彼女もまた心の変化を経験した。「『わたしの家族』をやって、視点が変わってきました。子供たちが先祖を知ることが大事。子孫のために(記録を)残すのではなく、子孫に引き継いでいくことに意味がある。こつこつと自分でやっていた作業だけど、それを開放していくこと

が子供たちのためになるんだと。ずいぶん考えが変わりました。」

早彩姉妹も証する。「『わたしの家族』に集中して取り組んでいるとき、自分は守られている、誘惑から遠ざけられていると感じました。」今、早彩姉妹の関心は青少年とその先祖の救いに向けられている。

坂本家族は、『わたしの家族』に取り組んだことで、家族間での尊敬や理解が深まり、自分が大きな家族の一員であるとの自覚と誇りも強まったと実感している。坂本家に生まれてきたことへの感謝、自分がなすべきことへの洞察、子孫が発する言葉の重み——穏やかで楽しい語らいの中に、家族歴史がもたらす計り知れない影響力の一端を見た思いがした。◆

## ★「わたしのおじいちゃん・おばあちゃん」の人生を記憶に留める——

ルポルタージュ

# リアホナ・ライターコンクール: 実録記事の作品を募集します

リアホナの記事を執筆する才能あるライターの発掘と、青少年の家族歴史活動を奨励するため、記事のコンクールを開催します

### 成人部門 (19歳以上)

あなたの周りの誰か(きょうだい、両親、祖父母や親しい会員など)から話を聴き、人の心に訴えて信仰を鼓舞するような人生経験や体験談・証を記録した、印象的なルポルタージュ(実録記事)を書いてください。ご自分の経験は記さないでください。

### 青少年部門 (中学生・高校生)

あなたの両親や祖父母から、信仰を鼓舞するような人生経験や体験談を聴いて記録する印象的なルポルタージュを書いてください。冊子『わたしの家族』やアプリ「Family Search-思い出-」に記録することをイメージして聞き書きしてください。

### 執筆上の注意

★実録記事(ルポルタージュ)とは、取材によって得た事実や証言、証拠を基に、一切の虚構を排して書かれる記事です。

★事実関係に誤りがないかどうか、筆者の推測、憶測で書かれた部分はないかをよく吟味してください。応募前に、出来上がった原稿を取材先に読んでもらって確認するとよいでしょう。

★文体は不問。最少字数は1,000字、上限を2,000字とします。

### 応募要項

締切: 2015年3月1日

応募: 以下のメールアドレスにお送りください。

okadat@ldschurch.org (担当: 岡田)

\*タイトル、筆名、所属ユニット、住所、年齢、職業、電話番号を明記  
郵送の場合: 〒106-0047 東京都港区南麻布5-10-30

リアホナ編集室宛(ルポコンテスト原稿在中、と明記してください)

結果発表: リアホナ2015年6月号ローカルページ誌上

(選考過程や結果についてのお問い合わせには応じられません)

\*郵送の場合の原稿は返却いたしません。コピーを取ってご応募ください。作品は未発表のものに限り、応募は1人1作品までとします。

### 賞

優秀賞: リアホナローカルページへの掲載、ほか副賞

特別賞: リアホナローカルページへの掲載、ほか副賞

佳作: 日本公式ウェブサイトへの掲載、ほか副賞

\*成人部門優秀賞受賞者にはリアホナ編集室から専属ライター契約のオファーをさせていただきます。

\*掲載時に、原稿を編集室にて若干、編集する場合があります。

\*選外の作品でも、プロのライターが取材・加筆して掲載させていただく場合があります。

# 日本社会に根を下ろして16年

——一つの区切りを迎えたブリガム・ヤング大学ハワイ校 全国高校生英語スピーチコンテスト

2014年11月1日(土)、東京都武蔵野市の武蔵野ステーキセンター(吉祥寺)にて、ブリガム・ヤング大学ハワイ校 第16回全国高校生英語スピーチコンテストが開催された。全国各地予選を勝ち抜いた12人が日頃の練習の成果と英語力を競い合った。その結果、滋賀県立膳所高等学校2年の吉永汐里さん(関西第1地区)が優勝し、全国の頂点に輝いた。準優勝は啓明学園高等学校2年の森海渡さん(関東第2地区)、第3位は青稜高等学校1年の銭華純さん(関東第1地区)がそれぞれ選ばれた。

優勝した吉永さんはスピーチの冒頭に「わたしには心の奥に大切にしまっている言葉があります。それは『無償の愛』です」と語りかけた。「親は子供に無償の愛を与えるものなの。将来あなたの子供にわたしから受け取ったものをあげてちょうだい」と母親に言われ、自分の心が大きく変化するさまを表情豊かにスピーチした。吉永さんは副賞として、世界各国の大使夫人が集まる来年春の食事会に招待され、スピーチを披露する機会が贈られた。司会者に受賞後の感想を日本語で求められると、「家族という美しいテーマでスピーチをする決心をしました。皆同じような経験をしていると思いますが、真剣に、また深く家族を愛するということは難しいと思います。それでもこの問題を全力で解決できるようにしたいと思っています」と流暢な英語で語った。



来賓の元フォード・ジャパン CEO 佐藤勝彦氏は大会の終わりに、社会を支える最前線で働く企業人にも家族の重要性を強調していることを話した。「ここ数年この会に参加させていただきましたが、内容が年々優れてきている。わたしの高校時代、これだけ真剣に家族について考えたことがあったでしょうか。昨日までである企業の研修会を開いていました。彼らが海外に行ったときの家族のきずなの重要性、父親の役割、夫の役割など、そのような話し合いをしていました。」

2014年の大会をもって、16年間続いた、各地区予選大会から選出された全国の代表者が競う形でのコンテストは一旦終了する。これまでの大会を通じて高校関係者からは、「この大会の地区大会に出られただけでも誇りにしている」(東京都の私立高校教師)と言われるほどの大会に成長した。また、「このように全国の地区大会を開催するスピーチコンテストは数が少なく権威がある」(埼玉県の私立高校教師)とも評価さ

れた。この大会の出場者に授与される証書(Certificate)を提出して、大学の推薦入試で合格する生徒(関東地区)も出ている。

テレビ局、ラジオ局、新聞社等と共催する地区もあり、記事が新聞に掲載され、テレビ・ラジオの放送に入賞者が出演するなど、社会的な影響力も大きくなった。また、文部科学省をはじめとする行政や企業の後援も受け、日本社会との深い関わりの中で運営されてきた。これまで来賓として来場された、学校関係者、教育長、行政職員、議員、市長、米国大使館・領事館職員など多くのオピニオンリーダーの方々にも全国各地で高い評価を頂いた。この大会における教員会の長年の奉仕は、出場者とその家族や学校関係者に喜びをもたらし、また奉仕したスタッフ自身の喜びともなってきた。

来年以降は新たな形の大会運営となるものの、家族の大切さを伝えるこの大会の影響力には、全国の高校生や学校関係者から引き続き期待が寄せられている。◆

## ● 優勝スピーチ(日本語訳) Paying It Forward(無償の愛を受け継いで) 吉永 汐里さん



わたしには心の奥に大切にしまっている言葉があります。「無償の愛」です。今までは考えてもみませんでしたが、わたしはつい最近体験したことから、その言葉の本当の意味を学びました。今なら、多くの人にとってそれが大切なものであると分かるのです。

3年前、わたしの二人の兄は大学に通うために引っ越し、一人暮らしを始めました。

両親もわたしも賛成し、兄たちを応援しました。しかし、わたしはすぐに寂しくなっていました。ある日、耐えられなくなったわたしはつぶやきました。「お兄さんたちが恋しい。いますぐに会いたい。」母は頷き言いました。「わたしもよ。」その声は弱々しく、顔色もよくありませんでした。母はいつも気丈にふるまう人だったので、わたしはそのとき本当に驚きました。母は掃除も炊



左から、準優勝の森海渡さん、優勝の吉永汐里さん、第3位の銭華純さん

事も仕事もこなし、不満を言ったり弱さを見せたりすることさえなかったのです。

このあと、時折母は疲れ切った顔をするようになりました。わたしは、母が歳とともに、精神的にも身体的にも弱くなっているのだと気づきました。

わたしは、これより以前に、将来について考え、志望大学を決めていました。その大学は、兄二人と同じように家から遠いところにありました。この進路について相談したとき、母は良い決断だと言ってくれました。しかし、わたしは、自分が本当に正しい選択をしているのかと迷い始めました。わたしの父は仕事で忙しく、出張にもよく行きました。しかし母の心遣いのおかげで、わたしは寂しさを感じたことはありませんでした。わたしはそのことに本当に感謝をし、母を大切に思っていました。だから、わたしは恩返しをする時が来たのだと感じました。

志望大学には本当に行きたかったけれ

ど、母のために決断をしました。わたしは母のもとに行き、よく考えて家から通える大学を受験することにしたと言いました。母と一緒にいて、病気になったら看病をし、細かい思いをさせないようにしたいのだと。

しかし、それはだめと母は言いました。そして、わたしのために夢をあきらめないでと続けました。

わたしは、これまでたくさんのものを母から貰ってきたこと、そして恩返しがしたいと思っていることを精いっぱい話しました。

母は優しく微笑みました。「そんなこと必要ないわ。親は子供に無償の愛を与えるものなの。わたしに恩返しをしようなんて思わなくて良いのよ。でも、本当にそん

な風に思ってくれているなら、将来あなたの子供に、あなたがわたしから受け取ったものをあげてちょうだい。それで十分よ。」

わたしは胸がいっぱいになり、母の愛がどれだけ深いものなのか悟りました。

いまでも、わたしは母のためにできることはすべてしたいと思っています。でも、本当のわたしの「恩返し」は将来の子供のために取ってあるのです。母が惜しみない愛情を注いでくれたから、わたしは将来同じことができるでしょう。本当の家族とは、ただの血縁関係ではなく、絶つことのできないきずなを持った人たちなのです。そして、そのきずなが、無償の愛を次の世代へと受け継いで行くのです。◆

## ● ヒューマンストーリー

# 主に背中を押され、人生の行程を走る

——箱根駅伝のアスリートから専任宣教師へ 神戸伝道部 高橋賢人長老 たかはしけん と

**新** 春の風物詩として知られる箱根駅伝。毎年、1月2日から3日にかけて行われる、関東地区選出20大学対抗の駅伝競技会である。東京・大手町から箱根・芦ノ湖までの往復217.1kmで10人の選手がたすきをつなぐ。現在、神戸伝道部で働く専任宣教師の高橋賢人長老(会津若松支部出身)はかつて、大東文化大学から2008年、2010年の箱根駅伝に出場し、卒業後は実業団の選手としても活躍した。アスリートとしての葛藤や経験を経て、専任宣教師となるまでの軌跡を追った。

### 「上り」を目指したい

生後まもなく、賢人兄弟は新生児肝炎のため生死の境をさまよった。黄疸の程度を表す数値が正常値の300倍もあり、医師からは「とても助からない。諦めてください」と宣告されたという。家族や会員の祈りと断食により一命をとりとめたものの、3歳までは「あ〜」としかしゃべれず、小学6年生での垂直跳びは10cm。運動神経が抜群の兄の義人兄弟とよく比較された。

転機は中学3年のときだった。「おまえの兄は駅伝で活躍したから、多分おまえもやれるだろう」との理由で誘われ、駅伝

大会に出場。スポーツは得意ではなかったが一所懸命練習し、市の大会で区間賞を取った。少人数、しかも小差でやっとなかなか結果だが、少し自分



高橋賢人長老

高橋長老を支え続けた家族  
賢人兄弟は6人きょうだいの3番目である。  
後列左から2人目が賢人兄弟、  
左から3人目が兄の義人兄弟、  
後列右から2人目が姉のリベカ姉妹。



に自信が持てた気がした。さらに先生は、陸上部に進んで箱根駅伝を目指してみないかと勧めるが、賢人兄弟は「興味ないです」と即答する。彼の夢は2歳上の兄の通う高校に入学し、同じチームメンバーとしてバスケットボールで全国大会に行くことだった。しかし、兄の考えは違った。「賢人は体も小さいし、自分と一緒にプレーするとしても1年しかできない。少しだけでも成績を出せた陸上でチャレンジするのもいいと思うよ。」自分の後を追うのではなく、自分の賜物を見いだして、それを伸ばすようにと勧めた。

高校での陸上の成績は、地区では上位だったものの、県では歯が立たなかった。これで陸上生活も終わりかなと思っていた矢先、部活の先生から「賢人は上りが強いから、箱根駅伝を目指してみないか」と言われる。箱根駅伝は5,000mの自己ベストより速いペースで20kmを完走しなければならない。今の自分には無理だと思った。



「上り」とは、小田原から箱根までの上り坂が続く往路の5区を意味している。標高差864mを駆け上がる23.4kmの最も長い区間で、相当な脚力とスタミナを要求される。大東文化大学は「山の大東」とも呼ばれ、5区の上りが得意なチームだ。優勝争いの鍵を握る、大逆転もあり得る大事な区間、そこでの可能性を語ってくれる先生の言葉に、「上りを走ってみたい」という思いが湧き上がってきた。一方で、両親は賛成してくれたものの、伝道をどうするかでずいぶん葛藤した。

「大東大に進めば、駅伝に集中しないといけない。寮に入って24時間管理されるので、休学するわけにもいかない。」伝道は早くても22歳かな、と思った。

### びりから2番目からの出発

賢人兄弟は、チーム54人中びりから2番目のタイムで入部した。得意なはずの「上り」のタイムも名門校では並以下だった。寮では毎月誕生日の人を酒で祝う慣例があることを知り、賢人兄弟は、自分は教会員なので酒は飲めない、と先輩たちの前で話した。これをきっかけに、いじめや中傷が加速する。「お前は1年でびりだろう。おれの酒が飲めないのか。飲まないのならこれくらいのことはしろ。」ジュースに酒を入れられたり、頭からビールをかけられたこともあった。日曜日にはできる限り教会に行ったが、スーツ姿で出かけていると、私服で遊びに行く先輩からは、「ばかじゃないの。何をやってるんだ、スーツなんか着て。」電車の中でもばかにされた。寮に戻ってからも笑い種。中でも、教会名で色々なサイトを調べての罵倒には耐え難いものがあった。

朝4時に起きての食事当番や夕食の準備のときには、練習時間を作るのも大変だった。大会に出る選手の練習が優先されるので、練習場所を譲ることもしばしば。どんなに練習をしても勝てない。自分で自分はこんなに弱いんだろう。心が砕けそうだった。「おまえが箱根駅伝を走れたら、世界中の皆が走れる。おまえの後ろを走っていると元気が出るよ。」ばかにされる状況が2年間続いた。賢人兄弟は布団をかぶり、隠れて何度も泣いたという。

しかし、賢人兄弟が暗い顔をしていた

かというところではない。教会や陸上を辞めたいと思ったこともない。「いつも笑っていましたが。とにかく笑っていた。怒っても何も生まれませんから。先輩、理解してくださいね。」

「自分のやりたいことをやっているんだから、喜びをもってやりなさい。」父からも教わっていた。家族の存在は大きかった。

### 走っても疲れない体

大学2年の夏合宿のときだった。練習メニューを軽くこなすことができ、自分の力が一段階上がったと感じた。「自分が健康だと分かるんですよ。知恵の言葉の祝福もあると思います。走っても疲れることのない強い体を持つ、と祝福されてもいましたから。」箱根駅伝予選大会のメンバーに選ばれ、チーム4位の結果を出した。自分をばかにしていた先輩からは「お前、本当に強くなったな」と言われた。続いて、全日本大学駅伝を走る機会が与えられた。その結果、翌年の箱根駅伝での8区(平塚〜戸塚間の復路)の選手に選ばれた。

2008年1月3日、本番当日、緊張で朝から地に足がつかなかった。沿道を埋め尽くす人々、湧き起こる声援、選手を四方八方から取り囲むメディア。家族は友人たちを誘い、バスをチャーターして駆けつけてくれた。飲み込まれそうな雰囲気の中、賢人兄弟は「自分を信じなさい」という父の言葉を思い出し、自分が信じている神様に心を注ぎ出した。朝起きたとき、ウォーミングアップをするとき、走る直前にも心から祈ってから、神様に「行ってきます」という気持ちで試合に臨んだ。良い状態で走り、区間8位でたすきを渡した。

後ろから押されて、  
自分が前に進んで行く感覚をすごく感じて、  
何だろうこの力、と思いました。

が、次の選手が体調不良で棄権。大東大は40数年続いたシード権<sup>※2</sup>を失った。

3年生になると、もっと強くなりたいという思いが強くなった。しかし、絶好調で1か月後の予選会に向けて練習量を増やしていた9月、ばきっという音とともに倒れる。腰椎の骨折だった。本選への参加は断念、涙をのんだ。

### まだやれることがある

リベンジを誓った4年生。「おまえに山回り(5区)を走ってもらいたい。」監督に言われ、賢人兄弟は走りに力強さを求めて特訓を重ねてきた。

駅伝を間近に控えた12月10日、学校には多数の報道陣が集まっていた。関心の焦点は「今年の5区は誰か」ということだ。彼らの前で練習をしているとき、賢人兄弟は左太もも(ハムストリング)に肉離れを起こし、少し走った先で倒れてしまった。マネージャーがタオルで隠し別の場所に運び込んだが、すぐに痙攣<sup>けいれん</sup>が始まり、激痛で脂汗が流れ落ちた。頭が混乱し、何が起きているか分からなかった。

その後、2週間の安静とできる限りの治療を試みたが、出場は絶望的に思われた。「筋肉が切れているのだから走れない。0.1%走れたとしても、100%後遺症が残る。山回りは特殊区間だから走り切れない。」どのトレーナーも口をそろえて断言した。

家族や恩師や友人からは、最後の箱根駅伝だからバスをチャーターして必ず応援に行く、と言われていた。この事実をどう伝えればいいのか。不安と孤独の中、賢人兄弟は兄に電話をする。「いろいろ試してみなければだめだった。ごめん、出られない。」——「4年間を終える最後の最後まで、チームのために悔いのないと言える競技生活を送りなさい。」兄の声を聞き、泣きながらうなずいた。

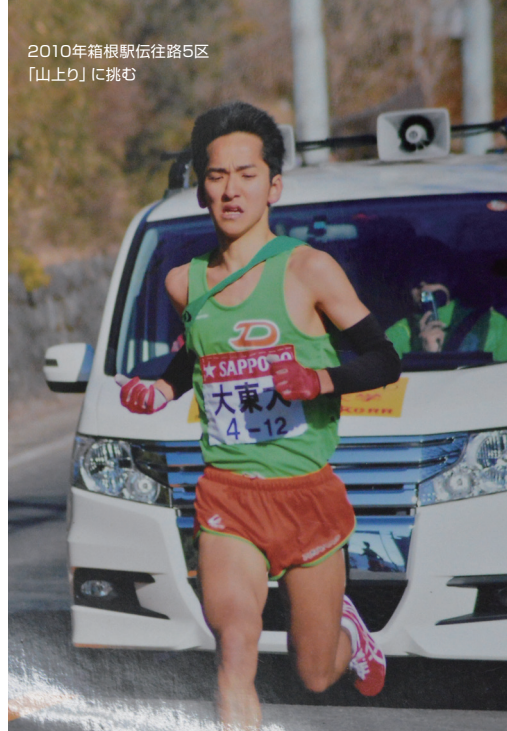
チームのサポートに回ることを覚悟し

た数日後、父から電話があった。調子はどうかと問われ、賢人兄弟は言葉を濁した。「まあまあかな。でも皆の調子もいいから、本戦に出られないかもしれない。」「けがをしたことは知っているよ。後ろめたい気持ちを持つことはない。やれることをやりなさい。」賢人兄弟は父に、これまでの努力と、それでも歩くこともできないことを話した。「まだやれることはあるよ。」父から重ねてこの言葉を聞いたとき、心に怒りが込み上げてくる。「やってるよ。」そう言い放つ息子に、父は優しく諭した。「神様に祈った？それが一番にやることだよ。」賢人兄弟ははっとした。「そうだった。自分は一番大事なことをやっていなかった。」電話を入れると、すぐにワードの神権者が駆けつけてくれた。寮の前に車を止め、その中で癒やしの儀式が行われた。けがをしてから初めて、祈りを通して「大丈夫」という言葉を聞いた。

### 背中を押されて駆け上った

その2日後、歩けるようになった賢人兄弟を見て周囲は驚いた。それでもトレーナーは、「もしかしたら走れるかもしれないが、将来のことを考えたら絶対走ってはいけない」と釘を刺す。

しかし、監督は意外な決断を下した。「おれが高橋賢人を箱根の5区で使う。だから、賢人は脚が折れてでも走れ。」——歴史のある大学で、しかも注目を浴びている山回りの区間。自分の状態と大きすぎるリスクを承知したうえで、監督は全ての責任を引き受けようとしてくれている。なぜそれほどまでの覚悟を——賢人兄弟は不思議に思った。監督は語る。「おれはおまえの信じる道を4年間見てきた。おれはおまえを信じる。」胸が熱くなった。監督はずっと自分を見てくれていたのだ。もう箱根駅伝本番まで1週間を切っていた。筋肉も心肺機能も弱くなっている。やれるところまでやろう、と思った。



2010年1月2日、十分な走り込みのない状態で、ついに夢に見た箱根駅伝、往路5区の檜舞台<sup>ひのき</sup>に立つ。「高橋、頑張れ!」の声援が聞こえる。何度も祈ってスタートを切る。

最初は思ったより調子が良かった。が、急な上り坂に差ししかかったところで、脚の痙攣が始まった。悪夢がよみがえる——「どうしよう。これからまだ10km以上もあるのに……」脱水でふらふらになり、虚脱状態であわや棄権かという状態になっ

※2—シード権：「東京箱根間往復大学駅伝に関する内規」により、10位までにゴールした大学は、予選免除で翌年の出場権を獲得する



実業団の選手として走る



実業団から出場した8,000mレースで優勝

た。「神様、助けてください！」賢人兄弟は心の中で叫んだ。

すると、後ろからぐいっと押される感覚があった。「後ろから押されて、自分が前に進んで行く感覚をすごく感じて、何だろこの力、と思いました。」痙攣している足で、しかも、最も険しい864mの標高差を駆け上がっていく。どこを走っているのかも分からない朦朧とした意識状態の中で、その力はゴールまで賢人兄弟を押し続けた。

家族は芦ノ湖のゴールで待っていてくれた。治療に向かう担架で運ばれながら、「よく頑張ったね。」涙を流しながら喜ぶ家族が見えた。タイムは良くなかったものの、「この光景を見て感動した。力をもたらした」などの大きな反響があった。

文字どおり死力を尽くして、大学4年間の競技生活は終わった。

### 謙遜になりなさい

大学卒業後、賢人兄弟はもう少し陸上をやりたいと思った。まだ納得のいくタイムは出せていない。複数の企業からの勧誘があり、賢人兄弟は山形の某製薬会社のユニフォームを着て走る道を選ぶ。「あと2年だけ陸上をやりたい。伝道は2年後の24歳に出る」と家族に伝えた。「何事も引き延ばさない方がいい。」母は息子に警告した。

山形での競技生活はいろいろな面で優遇され、注目もされた。東北大会では3連覇し、区間新記録も出した。個人種目でも優勝。翌年の全日本選手権の切符も手中にあった。一方で、教会に行くには車で片道1時間かかった。賢人兄弟は次第に教会から足が遠のくとともに、信仰も弱くなっていった。約束の期限はとうに

過ぎ、就職して4年目になろうとしていた。「これからの人生どうするの？」家族の心配する声に、「自分の人生だから自分で決める。」思い上がった息子に父は怒った。「謙遜になりなさい。」賢人兄弟はその言葉に驚き、謙遜について考え始めたという。「謙遜ってどんな意味だと思う？」と兄と母が尋ねる。「結構です、って控え目になるということかな……」と賢人兄弟。「違うよ。主の御心を行うことを謙遜っていうんだよ」と返され、胸が痛んだ。「ああ、自分は全然主の御心を行っていない。」いつしか箱根での奇跡も忘れ、慢心していた自分。伝道も引き延ばしてばかりいた。25歳と10か月のときだった。

その頃、結婚してアメリカに住んでいる姉のリベカ姉妹の家族が帰国した。賢人兄弟は心の底にある問いを投げかける。

「お姉ちゃんは神様が本当にいると思っているの？」

「絶対いるよ。心で感じる事ができるんだよ。」姉の言葉の強さに驚く。「賢人は心から求めたことがある？ 神様は心を見るんだよ。」

振り返ると、走るときは心から祈ったけれど、伝道や将来のことについては心から祈ったことがなかった。賢人兄弟は久しぶりに祈り、聖典を手にとった。教義と聖約第4章がぱっと開き、聖句が目飛び込んでくる。「おお、神の務めに<sup>い</sup>出で立とうとする人々よ、……あなたがたの心と、勢力と、思いと、力を尽くして神に仕えな

さい。」強い御霊を感じて鳥肌が立った。それはかつて兄から贈られた聖句だった。

東日本大震災の後、義人兄弟と二人でボランティアに行ったときのことだった。「伝道にでも出ようかな。」軽く口にした言葉に、「そんな気持ちで伝道に出てはいけない。安易な気持ちでは刈り入れをすることはできないし、刈り入れをする宣教師の迷惑になる。冗談でも言うのはやめなさい。」兄から強くたしなめられ、この聖句を示されたのだった。

決意は固まり、大急ぎで申請の手続きを済ませ、大管長会の認可を待った。高橋賢人長老は異例の26歳3か月で神戸伝道部に召された。

### わたしの望む称賛

伝道に出る直前、母が教えてくれた。「あなたが肝炎で死にかけたとき、お父さんはひざまずいてベッドに手を置いてこう祈ったのよ。『神様、この子を助けてください。この子がいつかあなたの福音を伝える宣教師として奉仕するように、わたしが責任をもって育てますので、どうかこの子を助けてください』って。それであなたは助かったのよ。」高橋長老の眼から感謝の涙があふれた。どれほど家族に愛され、優しく導かれてきたことだろう。

箱根駅伝を走れたらヒーローになれると思っていた。称賛も受けたが、駅伝を走ったことでたくさん失敗もし、道を見失うこともあった。でも、助けがあって新たなスタートを切れた。「いつか日の栄えの王国に行つて、最後まで堪え忍びました、と神様の前で報告できるようになりたい。これがわたしの望む称賛です。」

万事に満面の笑顔で伝道に励む高橋長老に、主に背中を押され、過酷な「上り」を最後まで力強く駆け上った、あの日の出来事が重なって見えた。◆



任地の豊岡支部にて。同僚のルイス長老と。

# 専任宣教師

●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット、MTC入所日



**池田 史門**  
東京南伝道部  
神戸ステーキ  
姫路ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



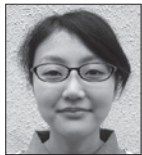
**石島 知樹**  
福岡伝道部  
神戸ステーキ  
松戸ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**板橋 マージョリ 麗子**  
神戸伝道部  
東京ステーキ  
小岩ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



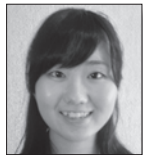
**内村 友貴**  
名古屋伝道部  
武蔵野ステーキ  
国立ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**進藤 愛美**  
東京南伝道部  
札幌ステーキ  
豊平ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**武富 彩**  
東京南伝道部  
沖縄ステーキ  
名護支部  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**林 恵美**  
東京南伝道部  
京都ステーキ  
大津ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**堀尾 美友**  
福岡伝道部  
藤沢ステーキ  
藤沢ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**吉田 彩子**  
神戸伝道部  
仙台ステーキ  
米沢支部  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**星 ひとみ**  
東京伝道部  
札幌西ステーキ  
函館ワード  
2014年10月21日  
プロボMTC入所



**砂川 海**  
オーストラリア・  
ブリスベン伝道部  
那覇ステーキ  
糸満支部  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**村山未沙子**  
オーストラリア・  
ブリスベン伝道部  
沖縄ステーキ  
那覇第一ワード  
2014年10月7日  
プロボMTC入所



**堀内 苑生**  
名古屋伝道部  
千葉ステーキ  
長生ワード  
2014年11月3日着任



**松谷 雅子**  
名古屋伝道部  
名古屋東ステーキ  
名東ワード  
2014年11月3日着任



**大石知香男・治子**  
名古屋伝道部  
さいたまステーキ坂戸ワード  
2014年9月29日着任



**牧瀬 十二郎・純子**  
東京伝道部  
大阪北ステーキ花屋敷ワード  
2014年11月10日着任

## 役員の変動

2014年10月25日から11月24日までに  
管理本部会員統計記録課に通知のあった  
役員の変動(敬称略)

- 日本高松地方部  
会長: Zackery H. Jackson  
第一顧問: 湯浅 雅志  
第二顧問: 桜井 基樹
- 日本武蔵野ステーキ  
第一顧問: 小林 博行  
第二顧問: 永田 卓也
- 鹿児島地方部宮崎支部  
会長: Chad D. Maris
- 高松地方部徳島支部  
会長: 村野 知
- 日本横浜ステーキ  
会長: 坂井 信行  
第一顧問: 沼野 範実  
第二顧問: 塩 幸也

### 伝道に召された宣教師(神殿宣教師, 奉仕宣教師を含む)の皆様へのお願い

任地の海外・日本国内を問わず、日本から召される宣教師をリアホナで紹介いたします。あなたの氏名とふりがな、出身ステーキ/地方部、ワード/支部、任地の伝道部/神殿名、MTC入所日を明記のうえ、(宣教師推薦書添付写真とは別個に) **直接『リアホナ』編集室宛てに写真をお送りください。**

写真は、**安息日の服装・髪型、無帽、正面向きで、明るく単純な背景になるべく大きくはっきりと写っているもの**が適切です。なお、デジタルカメラでお撮りになった画像データ(JPEG)を添付しての電子メール入稿(下記アドレス宛て)も歓迎いたします。その際は可能な限り画質の高い撮影(200キロバイト以上)をお願いします。

### 皆様の情報をご提供ください

◎末日聖徒イエス・キリスト教会  
『リアホナ』編集室

〒106-0047  
東京都港区南麻布5-10-30  
TEL. 03-3440-2666  
FAX. 03-3440-3275  
電子メール: [okadat@ldschurch.org](mailto:okadat@ldschurch.org)

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、その他商品に関するお問い合わせ——  
**教会配送センター**  
TEL. 03-5668-3391  
FAX. 03-5668-3392